

「ゆうだい21」の特徴と栽培上のポイント

宇都宮大学農学部附属農場
2016年1月

ゆうだい21の特徴 (コシヒカリとの比較)

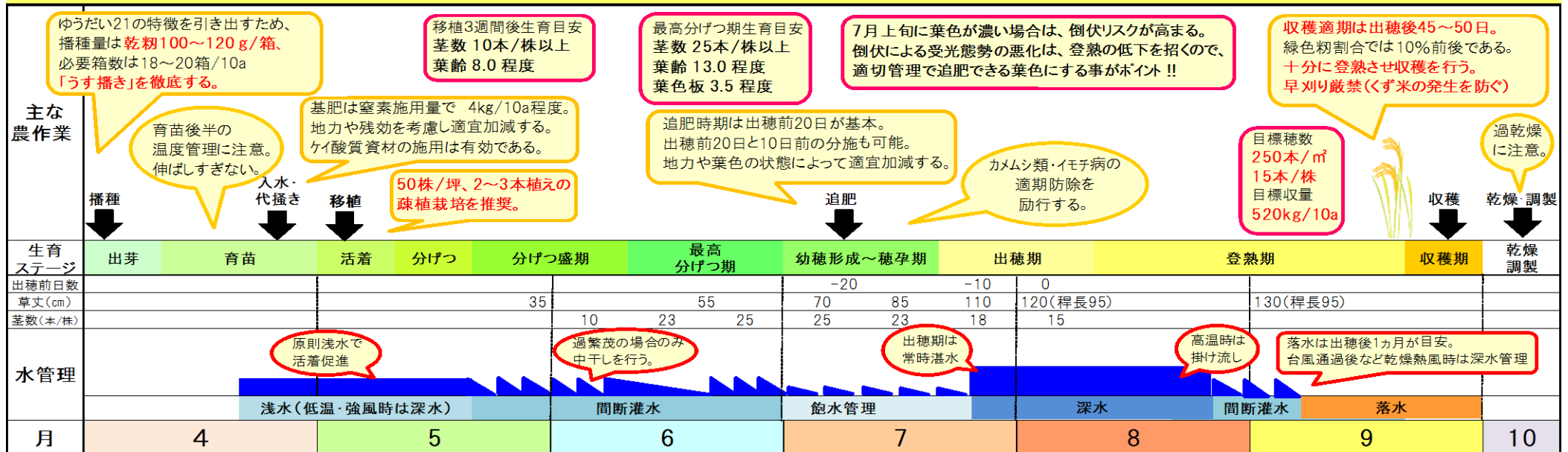
- ・出穂は2~3日、成熟は4~5日遅い。
- ・稈長は5~10cm、穂長は2~5cmほど長い。
- ・1穂粒数は多いが穂数はやや少なく、登熟歩合はやや低くなる傾向があり、収量性は同程度。
- ・いもち病にやや強く、穂いもちへの移行が少ない。
- ・高温条件下での栽培でも乳白米などの発生が少なく、外観品質が低下しにくい。
- ・収穫適期幅が広く、刈遅れによる品質低下が少ない。
- ・特有の粘りでコシヒカリを上回る良食味品種である。

栽培上のポイント

- 【栽培適地】栽培適地はコシヒカリ栽培地域とほぼ合致しており、播種、移植時期ともにコシヒカリに準じる形でよい。
- 【種子予措】種子の休眠が深いため、浸種期間を1~2日程度長めにすることで催芽時の揃いが改善される。
- 【播種量等】乾籾100~120g/箱、必要苗箱数は18~20箱/10a。なるべく播種量を減らした「うす播き」がよい。
- 【移植】栽植密度は15~17株/m²(50株/坪)、1株当たり2~3本植えの疎植気味の栽培がよい。
- 【肥培管理】基肥・追肥共に現地のコシヒカリ並みでよい。窒素施肥量で基肥4kg/10a程度とし、追肥は出穂20日前を目安に同2kg/10a程度を施用する。さらに同10日前施用を加えた2回の分施でもよい。一発肥料の場合は後半まで十分に肥効が持続するものが望ましい。地力や移植時期に応じて適宜加減をする。(特に肥沃な土地では肥培管理に十分に留意すること。)
- 【病虫害防除】コシヒカリ慣行栽培に準じてよい。いもちには比較的強いのでコシヒカリよりも防除の必要度は低い。縮葉枯れ病が多発する地域では、必ず防除すること。
- 【収穫】緑色籾の割合で10%前後が刈り取り適期である。刈遅れに伴う品質の低下がコシヒカリより小さいため、十分に登熟させることで、収量を確保することができる。(くず米の減少を図れる。)

ゆうだい21の栽培ごよみ

基本技術の励行で安定多収・高品質栽培を目指そう!!



※上記の栽培ごよみは、ゆうだい21の育成地の栃木県真岡市における標準的な栽培様式である4月上旬播種(稚苗育苗)、4月末~5月上旬移植を基本にして、作成しております。気象・土壌などの栽培環境や作期が異なる地域では、必ずしも適合しない部分があることも予想されます。それぞれの地域の条件にあった栽培を目指してください。